
Destiny ~ 運命に抗う者たち ~

神流 輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Destiny 運命に抗う者たち

【Nコード】

N8091F

【作者名】

神流 輝

【あらすじ】

幼いときから殺し屋として育てられ、今や右に並ぶものもないと云われるほどの凄腕の殺し屋、ティアラ・ローズ。ティアラを殺し屋になるように誘った過去とは？彼女に本当の意味で心を許せるものができたとき、彼女を取り巻くものたちの歯車が狂いだす…。

File 0：プロローグ（前書き）

あまり上手な言い回しや表現などができないので、読みづらい部分もあるかとおもいますが途中で投げ出すようなまねは決していましたので最後までお付き合いください。

File 0：プロローグ

この世界には天使と悪魔がいる。

天使、天使といっても墮天使、神に背いた天使。

性別不明、年齢不詳のこの天使の仕事は殺し屋。

秘密結社コスモスNo.1の実力をもち狙った獲物は逃がさない。

優雅で華麗な様子からいつしかこう呼ばれるようになった。

悪魔、悪魔といっても掃除屋。犯罪者にとって最も遭いたくない掃除屋。

それ故にいつしかこう呼ばれるようになった。

天使と悪魔、ルシファーとディアブロ

この世界で最も強いとされる2人。

出逢うはずのなかった二人が出逢うときで運命の歯車が動き始める。

File 1：墮天使

ここはとある普通の高校のとある普通の教室。

いつもと違うのは欠席しがちなティアラ・ローズが今日は出席していること。

しかし、欠席しがちなせいとその性格から彼女に話しかける物好きはただ1人を除いて居なかった。

ただ1人声をかけるのはサキ・ヒメノ、クラス長で世界屈指のヒメノ財閥ご令嬢。

「ティアラ！久しぶりね！！いつも休むんだもの。…まあ、成績が学年トップだから心配は無いんだろうけどね。」

しかし、ティアラは何の反応も示さなかった。いつものことだ。普通の人だとここで懲りるのだがサキはそうではなかった。

「ねえ、ティアラ今日ヒマ？ケーキバイキングの割引券もらったんだけどみんなでない？」

変わり者で通っているティアラにサキが話しかけてくるのはクラス長として1人ぼっちの人はほっとけない、という偽善心からだといふのはわかりきっていた。ティアラはそれでも別に気にしない。

…もう、これから先親しい友人なんてつくるつもりもないし、つくれる筈もないから…。

ティアラはバンと机を叩きサキを見上げて言い放った。

「悪いけど、あたし騒がしいの嫌いだし用事あるから」

「そつかぁ、残念だな。じゃまた今度一緒行こうね」

本鈴が鳴り授業がはじまった。

久しぶりの授業は彼女にとって退屈なものでしかなかった。

本当は来なくていいのなら来たくもないのだが出席日数が危ないので来ざるを得ない、というのが本音だ。

休み時間になると女子達が興奮気味に話し出した。

「昨日ディア様がでたらしいよ！」

「本当にミカってディアプロがすきね。性別さえわからないのに。」

ミカは友人を軽くにらんで

「ディア様はぜえったい男の人なのー！」

と断言。

苦笑しながら友人も一言。

「言い切るね…」

「ディア様と言えばルシファーの噂聞かないよね。この頃」

ティアラはこの会話をきいて、はあとため息をついて天井を見上げた。

ルシファー…堕天使なんて…このまま消えてしまえばいいのに…。

どんなに優雅で華麗だといっても所詮殺し屋。

ティアラは殺し屋が世界で一番嫌いだ。

罪のない者から大切な者を躊躇なくうばう。“世のため、人のため”とは単なるキレイごと。殺し屋は殺人を正義とし天職とする狂った者たち。

自嘲的に笑ってティアラは手元の本に視線を落とした。

…ブルブル…ブルブル

ティアラの制服のポケットで携帯が振動した。席を立ち人目のつかない所でメールの内容を確認し、確認し終わるとすぐにメールを削除して席につき何事もなかったかのように再び本を見ていたが、内容は全く頭に入っていなかった。

学校が終わるとすぐに家に帰った。

「お帰りなさい！」

リク・ケイトが待っていた。彼女は中学を卒業すると高校へはあがらず前にもましてティアラのそばにいるようになった。幼いころからずっと…彼女はティアラのそばを離れようとはしない…。

ただいま、と言いながらクロゼットをあけて黒いスカート、黒いブラウス、黒い皮手袋、黒いコートに身を包んだ。黒いブーツを履いて外に出た。だが、白い羽のネックレスだけははずさなかった。そのリクは瞬時の状況を察し、自分は長い栗色の毛を1つに束ね、黒の短パン、黒のブラウス、黒の指貫手袋、黒のジャンパーに身を包みブーツを履いてティアラのあとに続いた。

メールの相手と待ち合わせの広場へ行く途中、知らない男とぶつか

った。

「おわっ！…っと、ワリイ」

と言われ反射的に

「いや」

とだけ反応した。

…彼女らの出会いがここで終わっていたのなら…たぶん…これから起こる悲劇は食い止められていたのかもしれない……。

広場につくと相手はもう先に着いていた。

彼の名はクルミナ・シアリード。コスモス―政府所有の殺し屋組織、裏世界を支配している組織―とティアラのパイプ役。

彼は常人には有り得ない深紅の瞳を持っているのだが彼の右目は潰れていた。おそらく、何かの時にナイフで突かれたのだろう。そのキズはかなり目立つもので右目から頬にかけて大きなキズ跡になっていた。

「で？」

ティアラが右手をだすとそれに青い封筒を置いた。

「へえ？青。」

封筒の種類は赤、黄、青の3つがあり赤は危険性大、黄は中、青は小というように任務の危険度を示している。ちなみにティアラはほとんど赤担当だった。

「まったく、年寄りどもはなぜティアラに青なんか渡したんだ。君は赤の任務で美しく舞うべきだというのに！ルシファアの異名を持つティアラに失礼だ！」

憤慨している彼はティアラに幼い頃から何故か懐いていた2つ下の弟分で、リクの1つ上だ。いつしかティアラのもとでコスモスではなくティアラのために働くようになっていた。

コスモスの中の最強の殺し屋集団プラネテス、幻の第9惑星に推薦されたほどの実力も持っていた。

ティアラがクルミナを無視して封筒を開くとそこにはターゲットの名だけ記されていた。

タカオ・ヒメノ

ヒメノ財閥トップでありサキの父親。それでもティアラは少しも動揺しない。ターゲットが知り合いの身内だからといっていちいち動揺していたらコスモスNo.1とは謳われない。

リクはちらりと心配そうにティアラをのぞいたが、誰かに気づかれないうちにもとの表情にもどった。

「今夜決行する。」

そう言い残してティアラとリクはすぐにヒメノ邸へむかった。下見に行ったのだが笑えるほど警備が穴だらけだった。リクは木の上から双眼鏡をのぞきながら呆れた。

「ガードマンが…入り口に2人…それとボディガードが…2人…と…これだけ？」

青封筒であつたわけが合点がいった。
ティアラとリクはそれから夜まで木の上でじっと機会をうかがっていた。

午前2時

黒に身を包んだティアラとリクの姿は闇夜と区別がつかなくなっていた。

木からストンと飛び降り、音もなくヒメノ邸へと向かった。
軽々と入り口の2人のガードマンを伸したあと静かにターゲットの許に向かった。部屋の入り口に2人のボディガードが立っていた。
2人が近づくとさすがに気づき、大声で叫んだ。

「侵入者！タカオ様、サキ様お部屋からー」

出るなと言う前にボディガードたちは伸びていた。

部屋の扉を開けると恐怖に顔を歪めたタカオが床にへたり込んでいた。

「こ…殺し屋…か…？」

「…心当たりがあるだろう？コスモスの怒りを買った。」

愛銃・ナイトメアの銃口をタカオの頭に向けた。リクはじっとその様子を伺っていた。リクがティアラの仕事の手伝いをすることはない。傍観者としてそばにいる。だから、ティアラはなにも言わずにリクを仕事につれていくのだ。

「ま、待ってくれ！！償いならいくらでもする！！私が死んだら、サキが…娘が独りになってしまふ！だから！」

…しかし、ティアラの目は冷たく輝いていた。一寸の迷いもない目…。

「パパ！！！！」

扉にサキが立っていた。

「サキ！逃げなさい！」

サキにはその言葉が耳に入らなかった。なぜなら自分の父親に銃を向ける者の顔を見てしまったから。

「ティ…ア…？…あ…なた…何…を…？」

「知り合いなのか？！」

驚く2人をよそにティアラはナイトメアの引き金に指をかけた。そして、なんのためらいもなくその引き金をひいた。

バンという音と共にサキの父タカ才は頭から血を流して倒れた。

「パパ！！嫌アー！！」

そう言っ父のもとに駆け寄ったがもう遅い…。キツとティアラを睨みつけ喚いた。サキは幼い頃に母親を亡くしている。

「パパが…パパが何をしたって言うのよ！！どんな犯罪だって殺人より重いものはないわ！！パパを…パパを返して！！この人殺し！！」

ティアラたちは踵を返して立ち去った。屋敷を出たあと屋敷からサキの泣き叫ぶ声が聞こえた。

「…殺しの理由なんて関係ない…あたしは与えられた任務を果たすだけ…」

心配そうに悲しそうにリクはティアラを見上げた。

少しサキを昔の自分と重ねてしまった。

昔のキズからまた血が流れ出したような…否、血は止まってなんかいないんだ…10年前のあの日から血は流れ続けているんだ…。

それから学校でティアラを気にかける人はいなくなった。サキは徹底してティアラを避けまくり少しでも目があつたりすると憎悪の念を向けてくる…。

…それでいい…それでいいんだ…。

あたしは殺し屋。神から見放された天使…。

ティアラは殺し屋が世界で一番嫌いだ。
その中に『自分』を含めて…。

File 2：悪魔

ある日の夕方

家の外で車が行き来をしている。

「ん？あゝ…バイト」

その車のエンジンの音に起こされて、リアス・ツールは目を覚ました。

「…げ！もう5時？！確か今日は5時30分にはいらなきゃなんないだった！やっべ！目覚まし気付かなかった！」

リアスは飛び起きて家を飛び出した。

道端を走っていると

「おわっ！…っと、ワリイ」

今朝からなにも食べずに爆睡していたための空腹がたたったのか女の子にぶつかってしまった。その子は

「いや」

とだけ応えた。その子が立ち去ってからその子と隣の子の真っ黒な装束が印象に残っていた。

1カ月前にはじめたばかりのバイト先であるガソリンスタンドに着

くとチーフが不機嫌そうに立っていた。

「ツール…30分遅刻だ。新人のくせに何回目だ？お前…もう来なくていい」

「マジっスか？！勘弁してくださいよ」

リアスは懇願したが取り合ってはもらえなかった。
チーフは呆れながら問いかけた。

「ツール…お前、本職は掃除屋だろ？そっちに精を出したらどうだ？」

しかし、ツールはただハハハとだけ笑い最後の仕事に取りかかった。

最後のバイトを終え

「さつてと、本業に力入れますか。」

とリアスは白い装飾銃を持って情報屋に行った。

悪魔と呼ばれるにはふさわしくない白い銃。しかし今ではディアブ口の象徴とも言うべき存在になっている。

行きなれた情報屋に行くとそこには何百という手配書が貼ってあった。

「ねえ、マスター。いいのいる？バイトクビになったから金稼いどかないと生活できねえ…」

マスターはリアスの問いに笑いながら応えた。

「…じゃあ、コイツはどうだ？ ブラウン・ウエザン賞金100万レスちよっと荷が重いか？」

マスターもリアスの正体は知らない…

リアスは机に5万レスを置いて笑い返した。この金は情報料。置いた金に等しいだけの情報しか得ることはできない。

「冗談！ 場所は？」

「パルプ通りにいってみな。気をつけてな。」

「サンキュー。あんたの情報は当てになるからいいや。」

その言葉にマスターはまたしても笑ってしまった。

「よく言うよ。そんだけぼっちの金で得た情報で捕獲に行くやつなんかいいぞ。もっと出せばもっと色々教えてやるつてのに。」

情報屋のソースは企業秘密。情報屋によつては嘘の情報を流す者もいる。それを見分けるのも掃除屋の一つの腕の見せ所だ。

リアスはマスターに手を振ってカランカランと店を出た。

そしてすぐにパルプ通りに向かった。もうすっかり夜の街並みだ。ブラウン・ウエザンは脱獄犯。彼はある街で不法な武器商人をしていて、多数の部下を従えている。人数、構成などほとんど不明だ。

しかし、100万レスもの賞金首、相当の手練れだろう。

「ん…パルプ通りにきたはいいけど…どこだよ…ん？ここら辺りとか…」

リアスはパルプ通りの一角にある建物に目を留めた。
たぶん、掃除屋のカンとでもいうのだろう…

「おっじゃまつしまあ…す…」

と小さな声で呟きながら入っていくと…後ろから声が聞こえた。

「なんだ？にいちちゃん？その銃…お掃除屋さんか？」

やたらと体のデカイ男がリアスの首を、まるで母猫が子猫を持ち上げるように簡単にひょいと持ち上げてしまった。

「かわいい姉ちゃんだったら、かわいがってやったのになあ。…まあ女みたいな顔してやがるが…」

リアスの目の前に手配書の写真と同じ顔の男が現れた。

「女みたいな華奢な坊やにオレが捕まえられる訳ねえだろ」

しかし、リアスは怯むどころか笑っていた。

「ボス、コイツ恐怖でおかしくなったんじゃ」

リアスを持ち上げている男が最後までいい終わらないうちにリアスは鉄棒の逆上がりのようにくると回り男の後ろで銃を突きつけた。

「ダメダメ、人を見かけで判断しちゃ。だから、警察につかまっちゃったんだよ？ブラウンくん。」

その言葉に逆上したのか、他の5人くらい居る子分に命じ、リアスを捕まえていた男共々リアスを撃ち殺そうとした。

リアスも銃をかまえて放った！

ところがそれらの弾は全て相手の弾の軌道を変えるためのもので、人にはあたらなかった。

「悪いけど、掃除中に一人でも殺したら報奨金が半分以下になっちゃうんでな。」

「…そ、その白い装填銃…ディアブロ…悪魔か?!」

「」明察」

仲間に撃ち殺されそうになった恐怖でのびてしまった男を床に残しリアスはブラウンに近づいた。相手も銃でリアスを狙っている、しかしリアスはその全てを銃身でたたき落としている。

リアスは絶妙なコントロールで恐怖で顔がひきつっている全員の脚に銃弾をかすめさせた。その後伸びた全員を警察に引き渡し100万レスを受け取った。

「うっし、これで当分は生きていけるな。」

File 3：出逢い

ティアラはあるビルの屋上…というか、屋根にのぼって月を見ながら唄っていた。

彼女は“殺し”をすると必ず独りでここにくるのだ。

だが決して、リクは来ない。彼女にはティアラのそばにいるべきときとそうでないときがわかるのだ。

これまで何回来ただろうか…

しかし、今日はいつもと違った。コツコツとティアラに近づいてくる足音が聞こえ、ティアラは咄嗟にナイトメアに手をかけた。

「おっと、先客がいたか…て君さっきの…こんばんは」

リアスの言葉にティアラは何の反応も示さなかった。

「君ねえ、挨拶くらいしようよ。…お、いい銃じゃん！…でも、なんで？」

銃を保持しているものはそう多くはない。護身用で持っている場合もあるが、たいていの場合、掃除屋か、もしくは…

ティアラはここではじめて口を開いた。

「お前も持っているだろう？」

「オレはこう見えても掃除屋なんだ。君も？」

ティアラはこの質問にこたえられなかった。ただナイトメアを見つめていた。これが逆にこたえとなった。リアスはその反応だけティアラが殺し屋であることを悟った。

そして、それを好んでやっている訳ではないということも……よつこらしよ、とティアラの横に腰掛けて改めて話しかけた。

「……んで？君なんて名前？オレはリアス・ツール」

「……あたしは……ティアラ・ローズ」

「唄うまいのな。」

それ以来しばしば2人は逢うようになった。待ち合わせているわけでも約束しているわけでもなく……

会っても基本的に話しているのはリアスでティアラはたまにポツリポツリと言葉をこぼす程度の会話しかしていない。それでも、2人にとってはとても心地よい空間であった。その少ないティアラの言動の中からリアスはティアラの心に宿る深い闇をみつけた。だけど、その闇には絶対に触れてはいけないと自分の経験から察して、ティアラの傷をこじ開けることはしなかった。

リアスにも苦い過去があった。

その日、誰にも話したことのない過去をティアラに打ち明けた。だから、どうだというわけではない。しかし、ティアラから自分と同じような匂いを感じたから知っていて欲しかった。ティアラは何も言わなかった。それが逆にとて救われた気持ちにさせた。安っぽい言葉で安っぽい慰めを言われるよりずっと……ずっとあたたかかった。『傷の舐めあい』そう聞こえるかもしれない。でも、それでも

いい。それでも、うれしかったのだから…。

そんな二人が出逢って2ヶ月の月日がたったある日。

いつものように2人並んで腰掛けていたが、いつもとはリアスの様子が違った。

フウと一息ついて口を開いた。

「君…は…殺し…、なんでやってんだ？好きでやってるわけじゃないんだろ？」

リアスがティアラに“殺し”について何か言うのは珍しい。しかし、ティアラはなにも言わなかった。リアスは気にする風もなく続けた。ティアラが質問にこたえないのには、もう慣れていた。

「…オレは…説教じみたことは苦手だけど…殺しはある人から大切な人を奪う行為…嫌になんねえのか？」

この言葉はティアラの胸に突き刺さった。ティアラがいつも思っていて、それでいて考えないようにしていること…。

「…そんなこと…わかっている…」

震える声で反論した。

「わかってないだろ。わかっているのなら——」

リアスが言葉を終える前にティアラは立ち上がりリアスを押し倒し叫んだ。

「わかってる！わかってる！わかってる！わかってる！もうずっと、ずっとずっと昔からずっとわかっていた！！お前にあたしの何がわかる？！なにも知らないくせに！あたしのことなんか何も！！」

「…ああ知らないね。知りたくもない。人殺しの理由なんて。だが、君のやっていることは正義じゃない。ましてや偽善ですらない。傍から見たらそう見える。」

わかっていた…自分でも…ずっと…しかし、いざ言われると心の中で何かが動く…。リアスと居ると感情が表に出てしまう。遠い昔から隠し続けてきたはずの感情が…。

それでも、今日も仕事に行かなければならない。なにも言わずに立ち上がりリアスの許を去ろうとした。

「苦しいなら苦しいと言っていいんだ！人は1人では生きていけないから誰かが必要なんだ！たまには自分の心の声に従ってみろ！！」

リアスは離れていくティアラに必死に叫んだ。

ティアラは教会に向かった。今回の任務は教会司教暗殺。封筒は赤。

全ての警備網を突破し司教の頭に銃口を向けた。

命乞いをする司教…。

引き金に指をかける墮天使…。

その時ティアラの頭でリアスの言葉がこだました。
苦しそうに顔を歪めて引き金を引いた。

…だが風穴があいたのは教会の天井。

リクは驚きの表情をかくせないでいた。今までずっと一緒にいてティアラがここまで苦しそうで感情をあらわにしているのをはじめてみた。

「…命乞いをするくらいなら…コスモスなんか喧嘩を売るな！！
…今夜中にこの街から出ていけ。」

腰を抜かしている司教を後目に言い放ち、立ち去った。

「な…ぜ…？冷徹非道の…ルシファー…が…」

その様子を視ていた男は拳を握りしめそこから滴る血に気にもとめず怒りで我を忘れかけていた。

「ティアラ…君を奪ったものを僕は赦さない。」

「…さつきは悪かった…」

座っているリアスの隣に立って詫びた。

「あたしは…銃は殺しの道具だと叩き込まれてきた。その考えは変わらない。だけど…銃と…自分の可能性を信じてみるのも…悪くないと思うから…」

リアスは微笑んで言った。

「いいんじゃない？間違ったとしても、オレが正してやるさ。」

エラソーだな。と自分自身を笑うリアスを見ながら涙がこみ上げてきた。

一人で生きてきたティアラが一番欲しかった言葉…。
それをリアスは簡単に言ってくれるんだ。

だが、ティアラは気づかなかった。

怒りの眼差しでその光景を見つめる男の存在に…。

File 4：別れ

「…今、なん…とおっしゃったの？プルート。」

プルートとはティアラのプラネテス内でのコードネーム、幻の第9惑星である冥王星…。人並みはずれた実力を持つティアラに与えられた名。プラネテスとはコスモス内最強集団のこと。コスモスには8つの殺し屋集団があり、プラネテスにはティアラを含め10人のメンバーがいる。

「あたしは…組織を…抜ける。」

ついに決心したティアラはプラネテスの隊長コードネーム、サンのもとに行った。

サンは30歳前くらいの女性、正確な年齢や本名は不明。ただこの若さでプラネテスをまとめる技量と実力は疑う余地がない。

プラネテスのメンバーはサンとプルートの称号を持つ者以外すなわちマーキュリー、ビーナス、アース、マーズ、ジュピター、サターン、ウラヌス、ネプチューンの8人はそれぞれ自分のコードネームと同じ名の集団のリーダーをまかされる。

「…プルート、あなたは力がありすぎる。組織…とりわけプラネテスは市民の自由のために行動するけれど、力のある私達にそれは許されないわ。」

「……あたしはもう利用されるのはごめんだ。」

ティアラはサンの言葉を受け入れず悲痛な声で断った。サンも負け

じと食い下がった。ティアラの傷をえぐるように…

「…『両親のことは…もう、いいのかしら?』」

自分の秘密を知られていたことに動揺した。誰にも話していないはずなのにどうして…。と。動揺を悟られぬようティアラは掌をきつく握りしめた。

「…11でプラネテスに入り、もう7年探し続けた…それでもダメだったんだ。今までは組織の力を利用するつもりだったが…もう…あたし独りでやっていく。」

サンはここまできてやっと思めた。

「…ふう、仕方ないですね。プルート、あなたはもともと政治や権力には興味のない人。自由を好むだけ…我々の脅威にはならないでしょう。ただし、もし不穏な動きが見受けられたら、我々の耳にあなただの名前が入ったら、私があなたを殺しにいく。この世界に組織の息のかかっていない場所はないわ。きっとあなたは一生、組織の目からは逃れられない。いいわね?」

ティアラは頷いた。サンは席を立とうとして付け加えた。

「力あるものは必ず人を引きつけるわ。人を遠ざける以上に…それを心に刻んでおきなさい。…ティアラ」

そしてサンは席を立った。

「よ。なんかいつもより楽しそうじゃん？」

いつもの屋根にのぼるとリアスがもう来ていた。驚いたことに一瞬、一瞬だけティアラは微笑んだ。

「…組織を抜けた…」

リアスはティアラを抱きしめた。そして…

「よくがんばったな。今まで辛かったろ。」

と、言ってくれた。たったそれだけだったのにティアラの心にスツと染み渡り温かく感じた。

しかし、その様子をクルミナは拳を握りしめそこから滴る血に気にもとめず怒りの眼差しで見つめていた。

「…あいつが…悪の元凶…！」

「…リク、ただいま。」

ティアラの声を聞くとリクは嬉しそうにトトトト…と駆けてきた。

「おかえり！！今日は早いね。彼氏とケンカでもした？」

リクはからかうように聞いた。しかし、ティアラは至って冷静だ。

「……彼氏……。あいつは友達だよ。」

ティアラは本当にそう思っていた。必要最低限の感情以外奥底にしまい込んでいたから気づくことができなかったのかもしれない。

「…リク。大事な話がある。…組織を抜けてきたんだ。」

リクは一瞬目を見開いたが笑みを浮かべた。

「ティア姉さんが決めたことなら僕はそれについて行くよ。」

ティアラはいつもリクの笑顔に支えられた。自分はもう笑い方さえ忘れてしまったようだから…

「…ありがとう。…今日は流星群が見える日だし…たまには散歩する?」

ティアラにしてはかなり珍しい。リクは顔を輝かせて

「うん!」と頷いた。

もう明日になろうとしているのに。昼と変わらず街は賑わっていた。それもそのはず今日は5年に1度流星群が現れる日…。あと3時間もしたら街中の灯りが消され人びとはみな空を見上げることだろう。ティアラは家に戻ってきていた。夜は冷えるのでリクを例の屋上に残し、2人の毛布を持って再び出ようとして、ふとあるものに気づいた。部屋の窓に1通の手紙が挟まっていた。不審に思いながらもそれを読み始めた。

…親愛なるティアラ・ローズ様

今宵あなたにかけられた悪魔の呪いを私が解いてさしあげます。

クルミナ・シアリード

はじめ、この手紙の内容が理解できなかった。

「悪魔の…呪い…?」

ハッとしてその手紙を持つ手と声が震えた。

「ま…さか…リアスを…」

ティアラは、彼を失いたくないという気持ちだけで街を駆けずり回った。リクを待たせていることは百も承知だ。だが…ティアラは大切なものをなくすかもしれないという恐怖によって突き動かされた。

「どこ？！どこに…」

広い街の中、そう簡単に2人の人物を捜せるわけない…。

そのころー

「あの…お宅どちら様ですか？彼女がオレを捜してる…ってー」
言葉を言い切らないうちにいきなりクルミナはリアスに向けて発砲した。

「…ティアラの名を…墮天使の名を汚す者は赦さない。」

リアスははじめて知った。ティアラの正体を…。ティアラが墮天使、ルシファーだということを。

「…そうか、彼女は墮天使だったわけか。だが、あんたが彼女の生き方を決める筋合いないだろう！？」

「ティアラは墮天使でなければならぬんだ。今も昔も、そして、これからも！」

言い争いをしながらも2人は銃を撃ち合っていた。しかし、お互いの銃弾はお互いに掠りさえしない…。悪魔と呼ばれた掃除屋とプラネテスに推薦された殺し屋、もとより実力は互角なのかもしれない。

「うづ、痛っ！」

リアスの脚を掠めた銃弾は跳弾し彼の利き腕をも貫いた。血を流しながらも必死に訴えた。

「あんたらみたいなのが居るから、彼女は独りで苦しみ続けてるんだ！自由に生きてなにが悪い？！」

感情をなくした目でなにも答えずクルミナはただリアスを見つめていた。

「リアス！！」

ティアラは2人をみつけリアスのもとに駆け出した。

クルミナはティアラがリアスを支えようと手を差し伸べたときティアラに向かって発砲した。ティアラが愛銃のナイトメアに手を伸ばすより先に何かが覆い被さった。

…リアスだ。

リアスがティアラの楯となり銃弾を浴びていた。

「あ…あ…」

ティアラは震えた。怒りなのか恐怖なのか…それとも両方か…。

「な…ぜ…。あ、あたしなら…あたしなら今の弾くらいどうにでもできたのに！！と…とにかく救急車！！！」

携帯を取ろうとするティアラの腕をつかみリアスは苦しそうに笑いながら答えた。

「なんで…だろうね…。き、きみがルシファーだったとは…。あー…あ…ル、ルシファーと互角だと…世間では言われてた…のに…なさけね。」

リアスから笑みが消えじつとティアラを見つめて言った。

「きみが…大切だったんだ…。ほ、ほんの…ほんの少ししか一緒にいれなかった…けど…。はじめから…惹かれてた…。これからは…どうか…自由…に…」

…リアスは動かなくなった。空には流れ星がなにも知らないかのごとく降り注いでいた。

「リアス…？」

死

この事実を目の当たりにしてティアラは押さえ込んでいた感情が爆発した。

「いやー！ー！ー！！！」

悲しみ、怒り、憎しみ…負の感情すべてを抱きクルミナに向かっていった。

しかし、クルミナはひょいとかわし夜空に消えていった。

『君の目が醒めるのはまだ先のような。君を救うためなら何も惜しまないよ。』

そう言葉を残して…。

ティアラはリアスを抱きしめながら3人の姿が浮かんだ…。

「いつも…いつも…どうしてあたしが助かってしまうんだ…！」

そのままティアラは気を失った。

その後、クルミナは反逆罪でコスモスによって抹殺された…と風の噂で聞いた…。

File 4：別れ（後書き）

対クルミナ編はまだまだ続きますm┐┐m

File 5：再始動

チュンチュン…

鳥のさえずりにティアラは起こされ目を開けた。

「…あたし…？」

はじめティアラは状況がつかめなかった。見慣れない部屋の一室で彼女はもうリアスがいらないことを思い出した。

「そっか…また…人に守られたのか…あたしは大切な人たちに…不幸をもたらすことしかしないのに…」

そして、ハツとリクのことを思い出した。焦ってキヨロキヨロすると隣のベッドですやすやと寝息をたてているのを見てホッとしたのもつかの間、ここはどこで、なぜここにいるのかという問題に神経を巡らせた。

そして、ナイトメアを自分が手にしていないことにいささか…いや、かなり不安を覚えた。

ガチャと部屋のドアが開いて1人の女性が入ってきた。警戒しながらその女性を見ていた。

「あら！！起きたの？お姫サマ！よかったあ。何か覚えてる？うちの前に倒れててその…リクちゃんだっけ？…が、姫を必死に起こそうとして…で、家に上げたの。…あ、うちの名前はジェシカ・カトウヌール。姫は？」

ジェシカは一気にまくしたてた。

「あたしはティアラ・ローズ。あたしの銃はどこだ。それとリアスは?!」

「お！わすれてた。ほい。」

ジェシカは引き出しの中からナイトメアを取り出してティアラに渡した。

「リアス？連れがいたの？うちが見つけたときは…リクちゃんも何…。」

とジェシカは困ったように口を濁した。

「そっ…か…」

悲しくつぶやいた。もし、このときティアラがリアスの遺体を探そうとしていたらティアラは後にあんなにも苦しまずにすんだのかもしれない…。

ジェシカは明るく問いかけた。

「掃除屋？」

「…いや…」

と返答に困っていると

「あ。護身用？結構いるものね。護身用にもってる人」

勝手にジェシカは自己完結してしまった。

「だけど、銃使えるんでしょ？うちと組まない？」

「組む？」

「うん。うち掃除屋なったばかりでちょっと心細かったのよ。ティアラは護身用でもそんな立派な銃を持つてゐるってことは多少腕が立つんでしょ？この際うちと一緒に掃除屋やる？ね？」

「…あたしの味方は…もう…リクだけでいい…」

「そーいわずに！リクちゃんも一緒に3人で！」

ティアラは考えた。彼女を自分の過去に関わらせたくないというのもあったが、悪くないという気持ちもあったのだ。それはリアスのことがあったからだろうが…。だからこそティアラ是という結論に割と早く達した。

「やった！んじゃよろしくね。」

こうしてティアラはジェシカと手を結んだ。このときジェシカも否応なく大きな渦の一部となった…。その渦の中心とは…いつたい…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8091f/>

Destiny ~ 運命に抗う者たち ~

2010年10月21日07時21分発行